

『更級日記』の中の「相模」

実川 恵子

『更級日記』前半に描かれる都への旅の記は、作者のみずみずしい感性によって捕えられた風景や自然の描写は、実に新鮮であり、また印象的でもある。なかでも、相模国足柄の闇夜に巡り会った三人の遊女の哀れな風情は、作者の心細い心情を癒し、後々の想い出としてとどめられたという一段は、日記中異彩を放っている。

この冒頭に置かれる上洛の記は、従来は少女時代の旅の体験を生きたき生きたきながら綴った紀行文であるというのが凡その見解であったが、最近では単なる回想の記と見ることに疑問が示され、むしろ日記全体の構成と大きく係る部分として考えられている。

そこで、この上洛の記の意味を探りつつ、『更級日記』の中の「相模」を辿ってみることにしたいと思う。

寛仁四年（一〇二〇）、秋の末、十三歳の少女であった作者は、現在の千葉県市原市にあった国府「いまたち」を出発して、竹芝寺を見、「あすだ川」を舟で渡り、相模国に入った。その最初に出て

くるのが「にしとみ」の描写である。

にしとみといふ所の山、絵よくかきたらむ屏風をたてならべたらむやう也。片つかたは海、浜のさまざま、よせかへる浪のけしきも、いみじうおもしろし。^(註)

「にしとみ」とは、吉田東悟の『大日本地名辞書』によれば、「中世私称の郡号にて、専ら箱根山中を指せるが如し、西土肥の義にして、訛りて西土美と為れるなり」とし、これに従えば「にしとみといふ所の山」とは、箱根の山々を指すことになる。また、更に前掲書は箱根権現縁起の「相州西富郡足柄郷」と、大永年間の権現棟札の「相川西富郡足柄郷箱根山東福寺云々」とあるところから、本来の「西土肥」が訛って「西土美」となったと説明する。

一方、この「にしとみ」を藤沢市遊行寺付近の丘陵一帯の「西富」であるという説もある。それは、この「にしとみ」の叙述に続く「唐土が原」、「足柄山」との地理的な順序や下文との関連において穏当であるという理由による。しかし、『藤沢市史』^(註)には「当時

の駅路と異なり、この藤沢西富近辺に旅行者を確認するのは鎌倉期に入ってからで、官人の旅であり、しかも婦女を伴っての長路の旅にこの未開の野路を通過したとは思えない」という疑問も提示している。いづれにしても確証はないが、現在の国道一号線、藤沢市西富付近からの丹沢、大山、箱根、天城、富士の一連の山々の遠望はまさに「屏風をたてならべたらむやう」に眺められる。また、西富清浄光寺（遊行寺）の延文元年（一三五六）梵鐘銘に「清浄之光御前湛海」、「松青朝日雲紫夕陽」云々と称えている淨域に日記の描写が一致する景観であることから、壮大な屏風を立て並べたような連峰の遠景と、寄せては砕け散る白波の近景は、作者の「いみじうおもしろし」という感動の表現にあらわれている。上洛の旅の最初に味わった雄大な自然は、都への憧れと共に心踊る心象的な風景となつて表出されているようにも思える。

この西富の描写に続いて、

もろこしが原といふ所も、砂子のいみじう白きを二三日ゆく。

「夏は大和撫子のこくうすく錦をひけるようになむ咲きたる。

これは秋の末なれば見えぬ」といふに、猶所々はうちこぼれつゝ、あはれげに咲きわたれり。「もろこしが原に、大和撫子しも咲きけむこそ」など、人々をかしがる。

とある。「もろこしが原」は、神奈川県中郡大磯町高麗地区の海辺を総称し、その名義は高麗人がこの地に居住していたところから呼ばれたものとされる（『大日本地名辞書』、『続日本紀』）。

この唐が原がどの辺りをいうのかは、定かではないが、現在でもこの当時国府のあった大磯の手前、平塚市西海岸花水川橋付近に「唐が原」や「撫子原」の地名が残されるところから、この付近を

唐が原と呼んでいた事實はあったようである。また、『平塚郷土史事典』は、「この唐が原は大磯町高麗地区の海岸寄りから平塚市西域一帯のかなり広い地域を昔から「もろこし河原」と呼んでいる。

この辺りは五世紀前後から朝鮮の人々が来住して集落を作っていたところで、現在地名として残っており、昭和初期まで花水川畔の小松の群生した所や海浜に群落があった」とある。

その唐が原の「砂子のいみじう白きを二三日ゆく」とあるのは、大磯付近の海辺から、二宮を経て小田原付近迄の海辺の行程を描いたのであろう。そこには夏の花の盛りを過ぎた大和撫子が、どこどこに残ったように物寂しげに点々と咲いている。その情景に接して、作者は「もろこしが原に、大和撫子しも咲きけむ」など人々をかしがると感想が添えられる。

ここに記された「もろこし（唐）」と「やまと（大和）」の対照的な地名の妙をとらえたのは、当時の常套の修辭技法ではあった。しかし、その表現上の関心のみならず、大和撫子が、盛りをすぎ点々と咲く様が、可憐でもの寂しく、作者の心を捕えたのであろう。そうした風景の中に語られた実感は、都への憧れを求めての旅の途次の触発された一つの事実として記されたのであろう。

そして、都への旅の一行は大磯付近から、相模湾の海辺を南に進み、国府津付近から西へ向かい、足柄越にかかることになる。その折の体験は次のように語られている。

足柄山といふは、四五日かねて、おそろしげに暗がりわたれりやうやう入り立つ麓のほどだに、空のけしき、はかばかしくも見えず、えもいはず茂りわたたりて、いとおそろしげなり。

足柄山は、『足柄下郡史』に「この更級の王朝時代は、一山一坂

の狹称ではなく、箱根、土肥をも籠めた山地一帯の地、つまり、足柄上、下両郡に亘る連山を汎称したのである」とし、現在の神奈川県と静岡両県の境にある金時山の北方の連山をさす。その北端の足柄峠を越え、箱根外輪の外を酒匂峡谷に沿って小総に出たものと思われる。箱根經由の東海道が、神奈川県と静岡県を結ぶ要路になったのは鎌倉時代に入ってからで、それ迄はこの足柄峠が東西を結ぶ主要な街道であったようである。

作者は、この難所足柄山を目前にして、「四五日かねて、おそろしげにくらがりわたれり」と記している。足柄越えが四、五日もの日数を要することに疑問は残るが、その難行の心理的な表現とも解せるであろう。この「おそろしげに」暗がりわたる地が作者の前にはばかり、また麓でさえも木々が生い茂って「おそろしげ」であるという恐怖感を重ね、日記の「場」として、印象づけている。この記述中の「えもいはず茂りわたる」という一文について、高橋和雄氏は、当時の自然環境の復原から文学風土論を解き、千年前の足柄山がシイやカシ類の原生林がうっそうと生い茂り「暗がりわたる」難所となしていたことを実証する。また、この足柄の記以後の東山閑居周辺の環境及び帰京して宿とした三条西宮の記では、「深山木」と記し、作者は人工の二次林と原生林とを明確に区別したことを指摘する。このように、足柄山の暗闇は作者の心理的な抑圧と重なり、日常性と隔絶された特別な空間、また異境として位置づけられてもいる。

麓にやどりたるに、月もなく、くらき夜の、闇にまどふやうなるに、遊女三人、いづくよりともなく出で来たり。

この足柄山の麓に宿ったというのであるから、おそらく坂本宿を

いうのであろう。前掲書『足柄下郡史』に拠ると、「この駅にも、旅人の徒然や旅愁を慰めるために、遊行女婦がおり、地方と京師、地方と地方との間に、交通が頻繁になり、阪東一円の咽喉で、国司や郡司の往来や、旅人の往来の盛なる坂本に、遊女の必要が当然起ったものであり、王朝期の坂本という地が足柄路の往来が頻繁で、賑った駅家であったことが推測された」と記している。

作者は、坂本宿の「月もなく、暗き夜」の「闇にまどふやうなる」暗闇の中から現われた三人の遊女たちによって、心細い心情を癒され、救いあげられるという、ある意味で非現実的な物語的世界が展開されてゆく。この闇の中より忽然と現れた遊女たちは、

髪いと長く、額いとよくかかりて、色白くきたなげなくて、
「さてもありぬべき下仕へなどにもありぬべし」など人々あはれがるに、声すべて似るものなく、空に澄みのぼりてめでたく歌をうたふ

と描写されるように、柄笠の下で灯された火によって闇の中から白く美しく浮かび上がり、更に声までが、空に澄みのぼるようになり、とに歌うのである。そして、またおそろしげな山中に消え、幼い作者は、悲しさでこの宿を出立することが心残りに思われるのである。足柄山でのこの体験は、後の美濃国境、野上の地で再び遊女達に会った折、再び回想されている。

麓に宿った作者達一行は、いよいよ険しい足柄山中に踏み入り、予想された恐怖感を実際に味わうことになる。足柄越えの最終部分は次のように記されている。

まだ、あかつきより足柄をこゆ。まいて山の中のおそろしげなること、いはむかたなし。雲は足の下にふまる。山のなからば

かりの、木の下の、わづかなるに、葵のただ三すぢばかりあるを、世はなれてかかる山中にしも生ひけむよと、人々あはれがる。水はその山に三ところぞながれたる。

麓からの足柄山の恐ろしさを描写した前段と比べると、ここでは「山の中のおそろしげなること、いはむかたなし」とごく簡単に記され、ここではむしろそれに続く雲海や三本の葵、三所から流れ出る水に作者の思いが寄せられていることに注目したい。葵は賀茂祭や都を連想し、この人間界から隔離されたような暗闇の空間に存在することに作者は救いを見出したのであろう。

やつのことで足柄山を越え、横走のある関山に泊り、駿河の国に入った、と結び、相模国紀行は終わることになった。

この上洛の旅の途次、相模国、特に足柄での体験は『更級日記』執筆の作者の内面的契機の核となるべき一段として用意されたものであり、東路の果てから都をさして上洛する東国と都の分岐点として足柄の地は意味づけられたに違いない。足柄が相模国の西南部に位置し、西方には山々を巡らしており、都との交通を隔絶したとはいえ、箱根などの古道を控えて、文化の進んだ大和人が、東国に於ける第一足跡を印する土地だけに東国一円に対して要衝をなす地であることを認めていた由である。そして、更にこの相模国足柄郡の位置が、坂東八国に対しての咽喉部をなし、東国の最も嚴重な関門は、足柄・箱根の画線を控え、都と東国の分水嶺として介在していたと見られる。

『更級日記』冒頭の「あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つ方に生ひいでたる人、いかばかりかはありけむ」と記して始まる上洛の旅

の記は、まさしく片田舎で物語への憧れに心踊らせる少女の都への憧れの旅でもあった。その都への紀行の折々に綴られる東海道の土地や風物や体験が何を意味するのであろうか。

西富から眺める屏風のような山々の連なり、白波の打ち返す海辺の様、唐が原の白砂にわずかに残された可憐な大和撫子、恐ろしげな闇の中から現れた遊女、うっそうとした山中の葵、流れ出る川、どれも作者の心を引きつけ、愛惜の情を呼び起こす。こうして、東国から都への旅を続けていくのだが、『更級日記』はこの本来の物語願望を成就する目的を果たし得た時、このことが自身の人生を悔いる「よしなしごと」として受けとめることになったのである。そうした時、物語世界の憧れに生きた東国への回帰こそが自らの人生の意味を確認し、つなぎとめる手段として貫かれたのであろう。足柄の段にはそうした作者の切なく、哀しげな心境が強く込められているように思えてならない。『更級日記』上洛の記における「相模」の風景は、東国への訣別と同時に、都と東国をつなぐ精神的基盤の上に成り立った一つの心象的世界として描かれたものであろう。

(注1) 本文は、『日本古典文学全集 更級日記』に拠る。

(注2) 第四卷(昭和47・3)の「更級日記における相模国の駅路」に詳しい。

(注3) 平塚市企画室市史編さん室編(昭和51・1)

(注4) 足柄下郡教育会編(大正13・1・25)

(注5) 『古典に歌われた風土』(92・11 三省堂刊)

(本稿は、学内共同研究「神奈川の伝承と文学」による成果の一端としてまとめたものである。)